負ける原因は言語技術教育にあった

三森ゆりか

「なぜ負けるのか」議事録を翻訳しながら、私はいつも考えていた。大学卒業後、大手商社に勤めた私は、東独プロジェクトチームに所属し、そこで主に東独の公団との間で開かれた会議の議事録を日本語に翻訳する仕事に携わった。議事録は交渉の展開を逐一文字化したものである。議事録を翻訳していると、交渉が相手側に有利に推移していく有様が手に取るように分かった。日本側が不利になるのは、外国語での交渉というハンディが問題なのではなかった。むしろ日本側の論理性の欠如による戦略の稚拙さ、それによる交渉の組み立てや展開のまずさが本質的な問題だった。私はそこではたと思いあたった。ドイツ人はこうした実社会での交渉ごとなどを想定して、国語教育を行っているのだと。

私は父の仕事の都合で、中高の四年間を西ドイツの現地校で過ごした。ドイツをはじめ欧米諸国では、自国語の教育において言語技術教育を実施する。簡単に言えば、言語はピアノやサッカーなどと同じく、適切な技術を指導することによって運用技術を獲得できるものである、と考えられているのである。ドイツの国語教育では、例えば次のような技術が指導される。説明・描写の技術、報告の技術、議事録の記述技術、要約の技術、絵やテクストの分析と解釈・批判の技術、論文の技術、議論の技術、ディベートの技術、プレゼンテーションの技術。これらすべての項目で、生徒は論理的に思考し、論理的に表現することが求められる。国語に限らず宿題や試験はすべて記述式で、穴埋めテストの類は一切ない。技術は体系的なカリキュラムに沿って系統的に指導され、高校卒業には大論文とプレゼンテーションの関門を通過しなくてはならない。授業は日本のように教師が一方的に教え込むのではなく、生徒と教員が議論をしながら互いの考えを深めてゆく形式のものが多い。そして、生徒はその結果を宿題として論述して提出する。ドイツ時代は見事に劣等生で、何を求められているのかさえしばしば全く理解できなかった私が、商社で議事録を翻訳しているうちに、ドイツの教育の中で求められていたもの、指導された事柄の意味をはじめてはっきりと理解した。そして、日本とドイツの教育の差に私は改めて愕然としたのである。

現在私はつくば研究学園都市で、「言語技術教室」を開いている。教室を始めて一一年になる。小学生から高校生まで、学齢期の子供たちを対象にした小さな私塾だ。教室のカリキュラムは、ドイツの国語教育のものを土台にして、日本人に合うように試行錯誤を繰り返しながら、私が組み立てたものである。使用している教材はすべて手作りである。この教室で私は、日本の国語教育とは全く異なった欧米式の言語技術教育を、カリキュラムに沿って子供たちに教えている。商社での経験から私は、次代の日本を担う子供達には言語技術教育が不可欠であると痛感したからである。言語技術の習得には、子供の時からの積み重ねが必要だ。大人になってから急にピアノを弾こうと思っても弾けないのと同じで、技術は一朝一夕では身に付かない。まして言語技術はノウハウではなく、思考の在り方全般に深く影響を及ぼすので、子供の時から訓練をすることが極めて重要なのである。

言語技術は欧米で生まれた。日本語と欧米語は異なった系統の言語だから、日本人が全く欧米人と同じに考えたり表現したりする必要があるといっているわけではない。しかし、今や世界は狭くなった。これからの子供たちは私たちの時代よりももっと多く海外に出てゆくだろう。国際社会で日本人が日本人としての尊厳を失わず、堂々と外国人相手に正当な主張をしてゆくためには、彼らと同じ土俵で物を考え、表現する技術を学ぶ必要がある。私が商社で経験した「負け戦」も、母語で言語技術の訓練さえ受けていれば、もしかしたら異なった結果になっていたかもしれない。技術は普遍なので、母語で適切な訓練を受ければ、その技術は何語にでも応用が利くからである。日本の公教育に、言語技術教育が導入されるのはいったいいつのことだろうか。先進国の中で日本が孤立せず、その経済力に見合ったリーダーシップを発揮してゆくためにも、今すぐにでも国語教育の中に言語技術教育を導入する必要がある。

これから一年間、言語技術について、私の意見や体験を紹介してゆく予定である。

（つくば言語技術教育研究所）